

城崎国際アートセンター
2027年度「アーティスト・イン・レジデンス プログラム」公募
申請するプロジェクトの詳細な活動内容、予算計画がわかる資料

申請者: 宮木亜菜

- A: プロジェクト「再生と保存のためのパフォーマンス #2」の活動内容
B: 本プロジェクトの契機となったドイツ・ケルンでの滞在制作・リサーチのまとめ
C: 予算配分

A. プロジェクト「再生と保存のためのパフォーマンス #2」の活動内容

1. プロジェクトの概要

私が申請するプロジェクト「再生と保存のためのパフォーマンス #2」(仮)は、下記の7つの活動で構成されており、2026年1月～3月に実施したドイツ・ケルンでの滞在制作・リサーチの内容を引き継ぎ、発展させる内容になっています。ケルンで発表したパフォーマンス作品「再生と保存のためのパフォーマンス」をプロトタイプ#1として、本プロジェクトでは「再生と保存のためのパフォーマンス」の2つ目のバージョンの制作を中心に城崎での滞在制作・リサーチを進行させます。

○ 7つの活動

活動1 | 「日記」の制作: 滞在中の日々を日記の手法を用いてパフォーマンス化する。

活動2 | アーカイブに関するリサーチ: 地域の歴史・震災復興資料の調査。

活動3 | 公衆浴場文化と身体のリサーチ: 外湯文化における身体の私性と公性の体験調査。

活動4 | ワークショップの実施: 参加者の記憶を箱に収蔵し、保管の誓約を結ぶプログラム。

活動5 | 「保存と再生のための彫刻」の制作: パフォーマンスに使用する構造体の制作。

活動6 | 「再生と保存のためのパフォーマンス」の制作: 作品の組み立て・稽古。

活動7 | 成果発表: スタジオでのパフォーマンス公演と交流会。

※各活動については3. で個別に詳述しています。

○ プロジェクトの中核: 彫刻とパフォーマンスの相互作用

本プロジェクトの中核を成す「再生と保存のためのパフォーマンス」(仮)は、私が「保存と再生のための彫刻」(#1では11個の黒塗りのダンボール箱をひと塊りにしたもの)と呼んでいる物品や書類を収蔵するために使用する保存棚のような構造体を使用した約60分のパフォーマンス作品です。

城崎でのリサーチや滞在中の体験は、「日記」の手法を用いて個別のパフォーマンス(断片)として彫刻の中に保存されます。成果発表では、計画と即興が入り混じったプロセスによって、彫刻からこれらの断片を引き出し、再生し、再び収蔵し直していく一連のやりとりを提示します。

本プロジェクトは、ステートメントに記載した3つの制作を複合させて発展させる試みです。用材を加工する彫刻的行為をアーカイブを作成・再生する行為と重ね、細切れの意図を含んだ人工的な記録物と人間との調和 / 断絶をパフォーマンスとして提示します。納められた断片とそれらを貯蔵する彫刻は相互前提の関係にあり、常に揺れながら日々変化するあいまいな相貌で中途にとどまり続けます。シリーズを重ねながら、独特な断片を集積させ、有機的なアーカイブとして成長させていき、また、このアーカイブはパフォーマンスによる再生行為で他者と結びついていきます。

※コンセプトの詳細については(2)をご参照ください。

○ 活動スケジュール

(滞在希望日程の第一希望のスケジュール2027年5月1日～5月31日に沿って)

日付	内容
5月2日～5月15日	日記の制作 (活動1)、リサーチ (活動2) (活動3)
5月16日～5月28日	本制作 (活動5) (活動6)、日記の制作 (活動1)
5月22日～5月23日	ワークショップの実施 (活動4)、日記の制作 (活動1)
5月29日～5月30日	成果発表 (活動7)、日記の制作 (活動1)

2. 本プロジェクトの手がかりとしたもの、関連して考えていること

(i)ドイツ・ケルンでの滞在制作・リサーチ

※要素が多いためB.に記載しています。

(ii) コロナ禍の 2020 年に発表した作品「机とおなかの歩き方」

本プロジェクトの着想に影響を与えたものの1つに、私がコロナ禍の2020年に発表した「机とおなかの歩き方」という作品があります。

この作品は、展覧会の間の毎週末に山でピクニックを行い、そこで拾ったものや食べたものの残材物、植物や菌類のようにピロピロと風に揺れる細長く切った紙に記した文章などを、京都の中心街の特徴である碁盤の目のようなグリッドをもつ構造体の上に置いたり、ぶら下げたり、貼り付けたりして、2ヶ月分のピクニックの断片的な記録が徐々に柔らかく連関した集まりになっていく様子を提示するというものでした。2019 年からのコロナウイルス感染拡大により、長期間にわたり人との接触を避ける日々が続きました。その中で、心と身体の安全を保つために不可欠な要素が浮き彫りになっていきました。

人々は(人気の少ない場所を探し)外に出て”ピクニック”を開催していました。同じく私自身も、その時期は例年よりもたくさんピクニックに出かけていました。それも、ただ昼食を食べるためにわざわざ外に出る。私はこれらの行為の重要性について考えざるをえませんでした。これ以降、”ピクニック”や”散歩”、またそれらの活動の中で偶然に出会う人々や、ちょっとした出来事、たまたま発見した落下物などが、現在の私の制作や生活において重要な手がかりになっています。



↑(参考画像)作品「机とおなかの歩き方」

本プロジェクトの「日記」と「彫刻」は、この作品の方法を部分的に取り入れたものです。本プロジェクトは、この方法に、他の制作で中心に置いていたテーマを再度導入するために、保存のための構造物に蓄積された日常的な行為とやりとりするための活動6のパフォーマンスを組み合わせた構想になっています。活動6のパフォーマンスは、生活の中で本棚に収納された本を相応しい時に引き出してページをめくり再び蔵う時のようなものや、自分で書いたメモを隙間に発見して予定になかったことをやってしまう時のようなものなど、計画と即興が入り混じったものを想定しています。生きている人間が資料と関わる時の態度や許容される解釈の幅、ライブで資料をどのように生き生きと再生するかなど、具体的な問いを扱いながら制作をします。

(iii)アーカイブ群「THE BLACK KIT」や、集積したものの印象

ドイツでのレジデンス時に、カッセルを訪れ、ドクメンタ・アーカイブに収蔵されている「THE BLACK KIT」のリサーチを行いました。※B-1.に詳細を記載しています。「THE BLACK KIT」のテキストやドローイング、写真などによってアーカイブされた数々のパフォーマンスアートの山が、移動式の棚の構造物に詰められ、膨大な資料が彫刻のように可視化されている様式に私は興味を持ちました。また、何らかの分類により整然とした倉庫、教授の雑多な研究室で地層のようにうねる紙束、リサイクルを待つ色とりどりの回収品の山、これらは「何かが起こる気配」をまとっており、この気配そのものが魅力的でした。本プロジェクトでも、アーカイブをこれらの気配をまとった彫刻のように立ち上げる方法についてさらに模索しようと考えています。

(iv)ミステリー作品に登場する断片

ミステリー小説や映画の中で起こる事件は、推論能力に長けた探偵なり刑事なりが、徐々に収集されていく各種断片をつなぎ合わせることによって解決されます。私は探偵の推理よりも物語の途中でクローズアップされる断片の方に強く惹かれます。この断片の魅力は、それらが可能性と限定を同時に仄めかしていることや、例えば「被害者の薬指についての金属臭」のように、その断片が持つ形式や組み合わせにあると思います。制作の各場面で参考にしたいポイントの一つです。現実の史料の断片に個人がふれることのポジティブな可能性と不穏な感じ、断片に埋め込まれた限定された価値への興味、これらは(活動2)のアーカイブに関するリサーチを行う動機でもあります。

(v)第4人称の語り

ドイツ滞在後に、私の制作の1つの特徴である「断片を断片のまま維持し、そのつど配置し直すという手法」に関連する作家を探して、その作品に触れていく過程の中で、ポーランドの作家オルガ・トカルチュクがノーベル賞受賞講演で提唱した「優しい語り手」の概念を知りました。彼女は、1人称の語りについてその意義を認めながらも、『私』という狭い視点に閉じこもることの危険性について警告していました。一方で、共感を示さず、すべてを上から見下ろす3人称の視点は冷淡

であり、個々の痛みに寄り添えないとも言い、必要とされるのは、世界を一幅の巨大な織物として捉え、人間だけでなく動物や植物、無生物の内部にまで同時に存在してそれらを内側から編み合わせる「第4人称の語り」だと説明していました。「3人称の語り」と「第4人称の語り」はどちらも全知の視点を備えている点では同じですが、「優しさ」の有無によって区別されます。トカルチュクの言う「優しさ」とは、自分以外の存在を注意深く集中して見るときに現れる、自発的で無欲な意識のことです。それは単なる感情移入を超え、他者の壊れやすさや傷つきやすさ、時の影響を免れない運命を深く受け入れる態度であり、事物や人との間に絶えず類似点を見出す技術でもあります。さらに、彼女は小説家なので、物語の創造において、この「優しさ」は人間以外の生き物や命を持たない事物、世界のあらゆる小さなかけらに人格や声、存在のための時空間を与えて生命を吹き込む役割を果たすと説明しています。私の解釈では、機械的だが網羅的な「3人称の語り」と「1人称の語り」が持つ人間の心理的側面のあいだで、理性的でありながら共感的とも言える倫理的な態度を獲得し、それによって語ろうとした時に現れるのが、「第4人称の語り」だと思います。

滞在後にこの概念を知ったことで、私がドイツで行った制作プロセスは、「3人称の語り」と「1人称の語り」を行ったり来たりしながら、両者を結びつけて変容させるための別の語りを探るものだったのではないかと考えるようになりました。トカルチュクの言う「第4人称の語り」＝「優しい語り手」の概念は、私の制作の曖昧な志向性に倫理的な指針を与えるものです。

3. 7つの活動の詳細

(i)「日記」の制作(活動1)滞在中の日々を日記の手法を用いてパフォーマンス化する。

私はあるきっかけがあって、2024年12月27日から毎日、就寝前に1000字の日記をつけるようになりました。内容は、その日の出来事やその日たまたま思い出した過去の出来事、近日中に予定されている何かについての平坦な記述が大半を占めています。

ドイツ・ケルンでの滞在制作・リサーチの計画を立てている時に、日記自体はどのような滞在スケジュールを立案しようとも、どのみち毎日書くことになることに思い至りました。なので、その計画の中にあらかじめ日記を組み入れておくことが自然な成り行きで、またそれが、寝る前に為される行為であり、とても近い過去をいくらか選別する形で記録していること、この私的な記録は、部分的に切り取ることで他者と共有して、楽しんだり、考えたり、ただウワーと悲鳴をあげたりできるものだと気づきました。また、制作・リサーチを集中的に実施するレジデンス期間に書く日記は、ほとんど自動的に、振り返られ選別された1日の中の何らかの要素をパフォーマンスとして再発見する内容になるだろうと考えました。このような経緯で、このプロセスを意図的に「日記の手法」と呼んで、ドイツ・ケルンでのレジデンスの中心に据えました。本滞在中でも「日記の手法」を使った制作を実施します。

○本滞在中に日記にアーカイブされるもの

日記には、(活動2)(活動3)のリサーチ先での体験や、リサーチとは無関係であっても1日の出来事の中で記憶に留めておきたいこと、なぜか思い出した昔のこと、書きたくないけど書かざるをえないことなどが記録されていきます。これらの記録は、単に無差別に記述されたものではなく、ある程度選別されることを前提としており、この選別によって特にそれと意識していなかった何気ない日中の動作などがパフォーマンスとして再発見されることになります。日記を制作の一つの方法とすることで、様々な事象が記述されていく私的なアーカイブの塊から、他者と共有可能な形で取り出すことが可能だと考えています。

また、日記は滞在前半のリサーチ期間にのみ書くものではなく、ワークショップの開催日や滞在中の制作日、成果発表の日も書き続けます。滞在中の日記は、日課として普段書いているものよりも文字数や絵の部分を増やし、毎日1000～3000字程度を冊子型のものではなく大きめの画用紙に書いて、制作プロセスとして床に並べて見比べたりできるようにする予定です。



↑(参考画像)ドイツレジデンス中に制作していた日記の様子

(ii)「アーカイブに関するリサーチ」(活動2)

滞在前半に、城崎(および但馬地域)に存在する、大正14年(1925年)の北但大震災からの復興に関するアーカイブなど、下記リストに挙げている城崎周辺の資料館・ミュージアムの資料・展示方法をリサーチします。多義的な出来事をどのようにまとめているか、また、ミクロな事象がどのような形で史料として残存し、位置付けられているのかについて広く知見を得ます。この調査では「展示のための什器・構造」にも着目し、(活動5)に反映させる予定です。実際に使用されている各施設には展示以外にも、それぞれのテーマを身近に感じることができる体験などがあり、これらの取り組みに関しても調査の対象にします。資料を活用した様々な活動に触れて、静的な資料をパフォーマンスに息づかせる技術について学びます。今まで私が触れてきたアーカイブに関しても、滞在中のリサーチと連関させようと考えています。リサーチ内容は、リサーチとは無関係に想起されたことなども含めて1日の体験・記憶としてすべて日記へと落とし込みます。

○リサーチの目的

アーカイブについて考えるときに、最初に念頭とされるのは、物質的な資料の保存に関する技術的な事柄です。しかし、人と人の間で交わされる会話や記憶、瞬間的に内発する感情や個人を特徴付けさえする持続的な情念などといった「非物質的なもの」を、どのように他者と共有可能な形で残すのかという問いが反対側に存在しています。この問いは、私の制作するパフォーマンス作品がそもそも「非物質的なもの」であることから持続的な関心の対象となってきました。また、この問いは、アート業界内の、記録を約束された大枠の影響関係から離れて、芸術の営みを眺めた時に、パフォーマンスアートに限定される問題ではなくなります。なぜなら、芸術に何らかの形で接点を持つのは、業界外に存在する大勢の人たちであり、このような個人と作品との微細な影響関係は「非物質的なもの」としてアーカイブの外側に追いやられているからです。ドイツ滞在中には、「非物質的なもの」を保存・継承し、現在を生きる身体を使って再生するための方法への関心から、芸術関連と戦争関連のアーカイブの同時進行でのリサーチを実施しました。また、「3人称によるアーカイブ(公的・客観的記録)」と「1人称によるアーカイブ(私的・主観的記憶)」の差異と類似性の探求のために、リサーチ内容を日記に書き込むと言うプロセスを導入し、公的・客観的記録と私的・主観的記録の2つとは異なる道を発見しようと試みました。本滞在中でも、領域を限定しないリサーチを通して、大文字の記録に回収されない個人の心情やディティール(ミクロヒストリー)を、現在形のパフォーマンスへと翻訳・洗練させていくための手がかりを得たいと考えています。

○現時点でのリサーチ先のリスト

以下は私がインターネットで調べた滞在中に訪れたい場所のリストです。(「→」は当該施設の中で特に関心がある事項)

◇城崎文芸館(<https://kinobun.jp/>)→北但大震災からの復興に関する資料。城崎温泉の成り立ちについて。外湯の今昔資料。入浴用具、入浴券の変遷。近代文学の作家が城崎の町や人とのように関わったのか。そこでしか売っていない小説。

◇豊岡市立歴史博物館一但馬国府・国分寺館一

(<https://www3.city.toyooka.lg.jp/kokubunjikan/index.html>)→豊岡市にある文化・歴史遺産、各年代の人々のくらしについて。縄文時代、弥生時代の展示品。国司と庶民の食事の復元模型。勾玉作り体験。木簡や土器などの資料の展示。歴史や文化財に関する本を集めた図書館コーナーがある。(館内撮影不可)

◇城崎麦わら細工伝承館(<https://kinosaki-spa.gr.jp/facility/mugiwara/>)→伝統工芸「城崎麦わら細工」に関する資料。麦わら細工製作の工程で使用する道具の展示。現代の職人さんによる作品から明治時代の作品まで様々な作品の展示。城崎麦わら細工体験でオリジナル作品(アクセサリなど)を作ることができる。

◇玄武洞ミュージアム(<https://genbudo-museum.jp/>)→岩石ゾーン・鉱物ゾーン・化石ゾーン・杞柳ゾーンに分類された展示空間。特に岩石ゾーンに関心がある。ミュージアム前を流れる円山川を約10分間遊覧する遊覧船がある。豊岡杞柳細工の原料となる「コリヤナギ」の素材性について。

◇温泉寺宝物館(<https://kinosaki-spa.gr.jp/facility/kinosaki-museum/>)→観音様の三十三身。城崎町内から発掘された埋蔵文化財を展示している。城崎ロープウェイの中間駅にあり、城崎の街並みを見渡す。

◇太田垣土郎資料館(<https://kinosaki-spa.gr.jp/facility/ootagaki/>)→関西電力初代社長、クロンダムの建設、城崎ロープウェイの発案。写真や当時の新聞の切り抜き。太田氏がかつて愛用していた物の展示(ゴルフクラブや急須など。)

◇豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地(<https://www.hachigorou.com/>)→湿地の周りをぐりと散歩する。湿地の形状。管理棟にてハチゴロウ(コウノトリ)の説明を受けられるかもしれない。散策の際の参考にできるようにブログを頻りにチェック。

◇後ヶ島(竜宮城)→日和山海岸沖に浮かぶ無人島。上陸はできないが、遊覧船から眺めることが可能。島に建てられた東屋に関する歴史や島の言い伝えなどを周辺住民に聴き取りしてみる、図書館で文献を探してみる。

◇香美町立ジオパークと海の文化館(<https://geo-umibun.jp/>)→水産加工実習室にて焼きちくわの調理体験ができる(10名から参加可。)明治時代に山頂に近い標高にトンネルを掘った際のおはなし。燈明杉の伝説について。ジオパークコーナー。数種類の足跡の化石をみることができる。町の特徴を再現したジオラマ。(城崎町からは少し離れている。)

(iii)「公衆浴場文化と身体の私性と公共性についてのリサーチ」(活動3)

(ii)のリサーチと並行して、日本独自の生活文化でありながら特異な空間である「公衆浴場(外湯)」のリサーチを行い、身体の私性と公共性について考えます。

留学時代にアイルランドのアーティスト、ナイジェル・ロルフ氏から受けた「パフォーマンスをするときの衣装は、スーツかヌードのどちらかであるべき」という指導の理由を、私は今でも考え続けています。8年ほど続けているヌードモデルの仕事や、日々のドローイング(裸身の女性を描くことが多い)、銭湯への興味、美術館で規制されるヌード表現など、常日頃から「ヌード」への関心があり、私はドイツのサウナ文化(近代ヌーディズム運動に端を発する男女混浴サウナ)をリサーチしてきました。そこには、社会的な属性を脱ぎ捨て、裸で空間を共有する仕組みがありました。

日本では、観光客と地域住民という、通常であれば交わらない見ず知らずの他者同士が「裸」で空間を共有し、お湯の中で身体感覚をほどいていくという体験が日常的に繰り返されており、これらの体験は訪問者にとってはかなり強度の高い体験だと思います。芸術の文脈の中だと、その場にいる全員が裸身で作品を体験するなどというのはかなり特殊な条件が揃わないと起き得ません。この体験自体が有している固有の価値や衣服という社会的な鎧を脱いだ状態で生まれる偶発的な出会い、交わされる対話の記憶、極めて私的でありながら公共的な場が開かれた「ヌード(裸体)」について、入浴を繰り返して考えたいと思います。これらの体験は(ii)同様、日記にアーカイブされていきます。

○現時点でのリサーチ先のリスト

◇一の湯→洞窟風呂がメイン。外湯巡りの中で一番ぬるい(らしい。)混み合う。ぎゅうぎゅうになる時もある。湯の神とともに火の神を守る。

◇地蔵湯→地蔵尊をまつている。

◇御所の湯→全面露天風呂。かまどの神。

◇柳湯→大正ロマン風にリニューアルされている。けが、傷に効果があるという伝説。

◇まんだら湯→城崎温泉発掘のはじまり。陶器製の露天桶風呂。田の神、食物の神。

◇鴻の湯→1400年前にコウノトリが足の傷を癒して発見された鴻の鳥伝説の温泉発掘の湯。庭園露天風呂。

◇竹野温泉 誕生の湯→日本海を一望できるロケーション。同施設の2階に北前船の歴史が学べる展示施設がある。

◇神鍋温泉ゆとろぎ→道の駅「神鍋高原」の複合施設。スーパー銭湯。

(iv) ワークショップ「昨日の箱を作る」の実施(活動4)

※ワークショップの内容は応募申請書の3ページ目に記入しているのでここでは省きます。

(v) 「保存と再生のための彫刻」(仮)の制作(活動5)

日記にアーカイブされた内容を整理しながら、個別のパフォーマンスを取り出し、それぞれに対応する形で「保存と再生のための彫刻」を制作します。

「保存と再生のための彫刻」は、物品や書類を収蔵するために使用する保存用の什器や容器のようなもので、(活動1)において継続的に発見されるパフォーマンス行為の貯蔵庫です。また、この彫刻は保存のための機能だけでなく、「再生と保存のためのパフォーマンス」を行うことを前提として再生や再演のための機能を持った構造物として制作し、(活動6)、(活動7)において中心的な役割を担います。他の活動内容とも連携しており、(活動2)のリサーチを通して、この作品の構造や細部は適時修正され、各リサーチ内容や、リサーチ外の事象は日記に書き込まれた後、最終的な整理を経てこの彫刻の中に貯蔵される予定です。

○ドイツ・ケルンで制作した「保存と再生のための彫刻」

同様の方向性で滞在制作・リサーチを行ったドイツ・ケルンでは、当初「保存と再生のための彫刻」は以下のような構造を想定していました。

- ・木箱の組み合わさったもの
- ・滞在先にある既存の棚や家具を組み合わせたもの
- ・ワイヤーを使用したもの
- ・クルト・シュヴィッターズの「メルツバウ」のようにアーカイブ自体がアーカイブを支えているもの
- ・増築建築のように全体があらかじめ想定されていないため形が不均整だが、倒壊したり自壊しないなどの最低限の条件を満たし自立しているもの

実際にドイツでのリサーチを続けるうちに、様々なアーカイブ施設で用いられている収蔵箱の存在に興味を持ち、カッセルにある埋葬文化博物館で見た黒塗りの棺桶の影響もあって、最終的に「保存と再生のための彫刻」は11個の黒塗りの箱を積み上げてひとかたまりの彫刻として制作しました。



↑(参考画像)ドイツレジデンスにて制作した「保存と再生のための彫刻」

○城崎で制作する「保存と再生のための彫刻」

今回の制作では、城崎周辺でのリサーチを通して、前作の「保存と再生のための彫刻」の形態や外観などが変化する余地を残してありますが、現時点では前作と類似したものを想定しています。

(活動1)で発見したパフォーマンスを城崎で収集した拾得物などと共にこの彫刻に保存するため、彫刻自体も、そこに収められる内容物によって形態が変更され、個体差が出ます。博物館などで用いられている收藏のための筐体は、膨大な数のアーカイブ資料を無駄なく保管しておくために大抵はその形態が均一な様式に一元化されていることが多いですが、私はこの箱を保存だけではなく、再生・再演のために用いることを考慮し、サイズや形態を内容物に関連して変更する方式をとっています。今回も種々の内容物によって様々な外観を持った筐体が積み上げられてひとまとまりになり、パフォーマンスの中で中心的な役割を担います。

今回の制作では、以下の要素について再考し、取り入れてみたいと考えています。

- ・艶のある黒で塗装した箱の象徴性について考える。(Black Boxという言葉、光沢感が持つ印象や効果、異なる色の使用)
- ・箱(もしくは箱の代わりになるもの)を、地域住民の方達に呼びかけて集められないか？(ドイツでは集めた段ボールはスタジオの廃棄物コンテナから見つけたもの。購入以外の方法で集める。)
- ・各パフォーマンスに使用する素材の集め方について整理する。(地元のやホームセンターやお店で入手できるものに限定する、使用したことのない・見たことの無い素材を積極的に使ってみる、など)

(vi)「再生と保存のためのパフォーマンス#2」(仮)の制作(活動6)

「保存と再生のための彫刻」に保存された個別のパフォーマンスを1つの流れを持った約60分の「再生と保存のためのパフォーマンス#2」として組み立てていきます。

○パフォーマンスの内容

「保存と再生のための彫刻」に收藏したものを取り出し、見たり、使ったり、読み上げたり、移動させたりして、パフォーマンスを再生し、再び收藏しなおすという一連の行為を行います。詳細は、B-4.をご参照ください。

○制作プロセス

(v)において制作した「保存と再生のための彫刻」の各パーツに収められたパフォーマンスを様々な順序に組み替えながら、稽古を重ねていきます。基本的には1人で試行錯誤を繰り返す

ので、ビデオカメラを用いて、試行のために行うパフォーマンスの様子を記録し、全体の構成を確認していきます。

○#2での新たな試行の案

- ・#1で行ったパフォーマンスを#2のパフォーマンスに組み込む可能性について試行する。(#1で使用した道具の再使用、#1の箱を#2の箱と同居させる、など)
- ・本棚や引き出しから不意に予期しないものが発見されるような機会を、積み上げられた箱と箱の隙間などを用いて考案する。
- ・観客に保存物の1つを手渡すなどの所作をパフォーマンスの一部として取り入れる。

(vii) 成果発表(活動7)

滞在最終週の土曜、日曜の2日間に、(活動5)で制作した日々のパフォーマンスのアーカイブが収蔵された「保存と再生のための彫刻」を一般公開し、(活動6)によって完成させたパフォーマンスの上演をおこないます。会場は城崎国際アートセンターのスタジオ(スタジオ3かスタジオ5)を想定しており、観客が自由に動き回ることができる形にしたいと考えています。パフォーマンスは計画と即興によってバリエーションが変化する60分ほどの内容です。パフォーマンスの後には、作家による、それぞれの箱に関してのエピソードトークなどをまじえた小さな交流会を行い、訪れた人たちからのフィードバックもいただきたいと思います。この際、参加者の方たちにパフォーマンスで使用したものを実際に手にとって触れてもらう機会を作ることも想定しています。



←(参考画像)ドイツレジデンスの際に行った「再生と保存のためのパフォーマンス#1」の様子

※参考としてドイツで行ったパフォーマンスについての説明と画像を下のB-4.に記述しています。)

B.ドイツでの滞在制作の詳細

2026年1月～3月のドイツ・ケルンでの2ヶ月間にわたる滞在制作で行ったプロジェクトの詳細を以下の1.～4.にまとめました。

1. アーカイブについてのリサーチ

カッセルにあるドクメンタ・アーカイブに所蔵されているボリス・ニースロニー氏が携わる「THE BLACK KIT」を現地で調査しました。また偶然にも現地で知り合った人が所有していた、ボリス・ニースロニーのアーティストブック(非売品)を見ることもできました。アーティストブックと名乗っていますが、本という形状ではなく、箱の中に写真やポスターといった資料が収められているもので、「THE BLACK KIT」の形式に通ずるものが見受けられました。

加えてドイツに存在する戦争に関する膨大なアーカイブ、特にリストに挙げている施設の史料・展示方法をリサーチし、それらを活用した様々な活動を誠実に続けている人たちとのやりとりを行いました。多義的な出来事をどのようにまとめているのか、またそれらをパフォーマンスティブに息づかせる技術について学びたいと考え、ミクロな事象がどのような形で史料として残存し、位置付けられているのかについてもリサーチを重ねました。

戦争は、人々の視線を「死」や「さし迫った危機」にひきつけ私生活を少なくとも半壊させます。しかし、戦争の背後にあるのも積層していく日々の微妙な変化や、生臭い主観的な判断であると考えました。為政者が表に漏らさなかった個人的見解や、理解が難しい高官たちのごこちないふるまいの結果と、博物館に収蔵される市民が書いた戦時中の私的な日記との間の差異と類似について考えることは、私の制作や生活にとって重要なことでした。ごく最近、危機意識を高めるものとして、米国防総省の一時的なデータ削除などの、事件とも言うべき出来事がありました。日本国内においても、学校教育における教科書の修正や保存資料の撤去が度々行われています。国家が内政や外交のために史料を消し去ること、史料になりうる現在の記録を残さないなどということは避けなければなりません。

一方、市民活動家たちの記憶の継承のための取り組みには、私自身励まされることも多いです。ドイツ滞在中に触れたものではありませんが、例えば、日本で1996年から開催され続けている「水俣展」は、アーカイブされた膨大な情報を整理し、順序立てて提示する方法を使い、巡回展を訪れてこの問題の詳細を知った鑑賞者も未だ解決していないこの問題の当事者になる仕組みになっており、とても強度が高く有意義だと思っていました。被害を受けた地域でそれまで営まれていた生活についての展示や、被害者の肖像写真なども配され、情報が立体的に見えるからこそ、被害の大きさや問題の複雑さが肌で感じられる展示になっていました。これまで私が触れてきたアーカイブも、滞在中のリサーチと連関させながら思索を深めました。

(訪れた場所: ルートヴィヒ美術館、ケルンイスラム教モスク、ケーテ・コルヴィッツ美術館、NSDドキュメンテーション博物館、コルンバ美術館、産業アーカイブ施設RWWA、自然史博物館、ケルン応用芸術博物館、デュッセルドルフ地域歴史博物館、チョコレート博物館、ボン女性博物館、植物園、K20、K21、クンストパラスト、デュッセルドルフ芸術アカデミー、カッセルクンストヴァーレン美術館、埋葬文化博物館、各所の墓地)

これらのリサーチ成果の記録を含めて、毎日3000字以上の日記を私的な資料として蓄積していました。

【リサーチ記録】(一部抜粋)



↑〈NSDキュメンテーションミュージアム〉
ケルンにかつて存在したゲシュタポの跡地である当時の建物をそのまま博物館にして歴史資料を展示している。地下には牢屋がそのまま保管されていて見ることができるようになっている。牢屋の壁に描かれた、文字や絵、いわゆる日記を、専門家たちによって、長年かけて保存する大きなプロジェクトが成された。



←〈産業アーカイブ施設RWWA〉
ケルン市内のあらゆる年代のあらゆるジャンルの産業に関するものを保管している民間のアーカイブ施設。チョコレート会社の昔の標章を額に入れたもの、工場の建物の設計図、歴代の電話帳、銀行の資料など。経営者が参考資料を探すのに利用したり、作家が映画撮影や本を書くにあたって歴史的資料を探しにきたりと、幅広い使われ方をしている。管理人の男性がありとあらゆる資料を開いて見せてくれる。



←〈地域歴史博物館〉
メモリアル・デュッセルドルフ
ナチス政権下のデュッセルドルフの町の様子を知ることができる歴史博物館。画像の顔写真は、それぞれ写真をひっくり返すと、その顔の人がどういう人で、何をしたか、されたか、という文書が書かれている。軍服を着て明らかに虐殺に加担していると想像した人でもひっくり返してみると実は裏で助ける作業をしていたといった情報が書かれている。加害者と被害者が並び、裏を見て初めてその人がどういう人か分かるという仕組みの展示。



↑
〈ドクメンタ・アーカイブ〉
メインのリサーチ対象であったボリス・ニースロニーが手がけた世界中のパフォーマンスアーカイブを集めた「The Black Kit」の一部。資料リストは約1200ページにわたる膨大な量であり、本来はアーカイブ資料は箱ごと可動式の棚に保管されているが、閲覧可能なのはリストから事前に選んだもののみ。アーティスト名もしくは「Body」「Flesh」「Jump」などといったパフォーマンスアートに関係する言葉が箱のタイトルに記されて、そのタイトルに沿って収集された資料や写真が各箱に収められている。



↑〈埋葬文化博物館〉
カッセルの埋葬に関するあれこれを知ることができる博物館。画像の黒光りした木製の台車のイメージが後に「保存と再生のための彫刻」で制作した黒く塗った段ボールのもととなった。

2. ヌーディズム文化についてのリサーチ

冬季のドイツにおいてヌーディズム文化が大衆的に息づく場である「混浴サウナ」に赴き、実際の体験調査を行いました。ドイツ滞在前に読んでいたヌードに関する様々な文献の中で、産業革命下における都市革命に対する反抗として芽生えた19世紀後半の近代ヌーディズムの理念(肉体文化運動)をもとに、第一次世界大戦前後のドイツで急速に発展したドイツ発祥のヌーディズム文化を知りました。日本と同様の温泉・入浴大国でありながら、男女混浴のサウナという独特の大衆文化を発展・維持させているドイツ固有の形式を身体的に検証し、どのような規律やマナー(衣服の着用制限や衛生ルール等)のもとで、裸体によるコミュニティが安全かつ快適に運営されているのかを実地に学びました。

3. 「保存と再生のための彫刻 #1」の制作

1.と2.のリサーチ及び日記の制作を経て、滞在制作の後半のプロジェクトとして「保存と再生のための彫刻」を制作しました。リサーチの過程で「収蔵棚」から「箱」へと興味が移っていき、毎日スタジオのゴミ捨て場を漁りあらゆるサイズ感の段ボールをスタジオに持って帰っては、埋葬文化博物館で見た黒光りした棺桶のように、光沢のある油性の黒色ペンキを裏表全ての面に何層も塗り重ねました。

次に、それらの箱に納めるものを決めるために、日記の内容を整理していきました。日記には、以下のようなものが混ざりあって書き留められていました。

例

- ・生活と制作を両立できる広々としたスタジオに対する歓喜
- ・チョコレートケーキを2切れ食べたことへの罪悪感
- ・「いかなる物質的なものも、この戦争を正当化することはできないし、いかなる補償も与えられない。この戦争を続けることはできない」1917年8月のフレデリック・チャンドラー中尉の言葉(読んだ本の内容)
- ・魅力的に感じたヘッドフォンの形
- ・思い出したくないもの
- ・誰かがスタジオに置いていったHUBERT FICHTEの「THE BLACK CITY」という知らない本の真っ黒な装丁について(ネットで調べたところ、米・ニューヨーク市のアフリカ系ディアスポラの中心地としての側面について多面的に調査・記述した本だったが、読まなかった。)
- ・美術館で「これ、ピタゴラスイチヤン」と思った
- ・子象の剥製を収蔵するまでのエピソード(自然史博物館でのリサーチ)
- ・スタジオのオーナーとの意見の相違について
- ・特定の宗教に関する考え
- ・スタジオの窓の外に見える溶接トーチの火花
- ・生理に関すること
- ・イスラエル政権を支持する2名と過ごした朝食会
- ・反論できなかったルイーズ・ブルジョアへの軽口
- ・膨大なアーカイブを把握し、私のために一連の資料を開いて見せてくれた男性職員の身のこなし(産業アーカイブでのリサーチ)

書き終えた日記は、スタジオに張った麻紐からぶら下げて、常に眺めることができるようにしていましたが、これらは日本語で記述されており、スタジオに急に訪問してくる人がいても、これらを読むことはできず、あくまで私的なアーカイブの領域に位置するものでした。

より具体的なパフォーマンスへと移行させるために、私的なアーカイブを、他人と共有したくない項目とそれ以外の項目とに分けたり、どうにもうまくパフォーマンス化できないと感じる記述を前に悪戦苦闘する中で、他人と共有不可能な極私的な内容や秘密めいたものを、言葉ではなく素

材や所作へと変換するプロセスに面白さを感じました。この変換の作業こそが、出来事・記憶を無味乾燥な記録にしないための「再生」の技術であると感じました。

最終的に、日記の中から箱の中に保存する内容を10点選びとりました。(複数の日付けの出来事や観想を組み合わせただけのものもありました。)

4. パフォーマンス作品の上演と観客の反応

滞在の最終週にギャラリーで発表した「再生と保存のためのパフォーマンス#1」は、「パフォーマンスをアーカイブする構造自体をパフォーマンスに組み込む」という手法を用い、制作した黒塗りの段ボール箱「保存と再生のための彫刻」を中心に進行する約60分の作品でした。

パフォーマンスは、光沢のある黒ペンキで塗装した11個の箱をすべて積み上げて、黒塗りの麻紐で縛って一つの塊にし、小さな車輪を付けた同素材の台車の上に乗せて、この塊をスタジオから上演会場であるギャラリーまで運ぶところから始まります。

11個の箱の内、10個にはそれぞれパフォーマンスを行うために必要な素材が保管されており、残り1箱は空箱です。紐を解き、箱を1つずつ取り分けて、蓋を開け、中にある素材や箱に施した仕掛けを使って1つずつパフォーマンスを行っていきます。例えば、カーニバル日の日記から着想した「青い羽をゆっくりと散歩させる行為」、チョコレート博物館と戦争歴史博物館へ行った日の日記をもとにした「板チョコが口元で溶けるまでの時間を計る行為」、不意に公示されたために投票できなかった衆議院選挙の投票日と産業アーカイブ施設に行った日の日記から紡いだ『不在』について書いたドイツ語の文章を読み上げる行為」などです。

それぞれのパフォーマンスの最後に、扱った素材の一部を採取して、唯一の空箱の中に集める工程が組み込まれており、すべてのパフォーマンスを終えると、空だった箱の中に10個の異なる素材によって構成された1つの小さな彫刻が出来上がります。最後にその小さな彫刻を入れた箱を閉じて、パフォーマンスは終了します。

本パフォーマンスでは、訪れた人がギャラリー内を自由に歩き回ったり、出入りしたりできる、オープンな環境を設定しました。長尺のパフォーマンスなので、途中で退出する人もいるだろうと予想していました。実際にパフォーマンスを開始すると、途中退室する人はいませんでした。単なるマナーの問題かもしれませんが、私はその場にいた人たちが各パフォーマンスの微細な所作を集中して見つめ続けているように感じました。

ある人は終演後、「プレゼントを開ける時の高揚感と、他者の私物を覗き見るような緊張感が同居した感覚があった」と私に伝えてくれました。この言葉は、まさに私自身がアーカイブ施設でのリサーチ時、保管された資料の箱を開けてもらう瞬間に抱いていた感覚そのものでした。私がリサーチ過程で経験した「未知の資料にアクセスする際の手続きや心理的状況」が、パフォーマンスという形式を介することで、そのまま観客の鑑賞体験として再現されたのだと確認できた出来事でした。

【「再生と保存のためのパフォーマンス#1」の記録】



「保存と再生のための彫刻」パフォーマンスが始まる前の状態



積み上げた箱を固定した紐を解いていく。



1番上に積んでいた唯一の空箱を展示台に配置する。

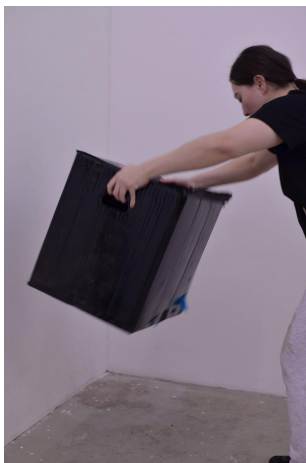


箱①

素材：バター、ナイフ、ガラス

手の平にバターを塗り、箱の表面に固定したガラスに手の平を押し付ける。

（毎日食べていたドイツのバターのこと。200グラムで1€以下という破格の安さ。）



箱②

素材：青い羽、ふわふわの植物、透明の半球

箱に空いている穴から青い羽とふわふわの植物がそれぞれ一つずつ飛び出るまで箱を振り続ける。

飛び出た青い羽とふわふわの植物を透明の半球に閉じ込めて地面と壁を散歩させる。（カーニバルの日の出来事から。）

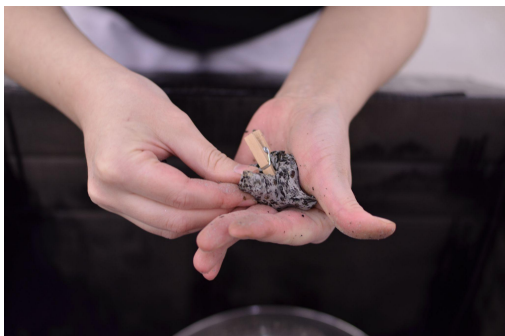


箱③

素材：板チョコ、針金、ライター、ハサミ

火で炙った針金の先っちょで板チョコに穴を開け、板チョコを口にくわえた状態に止まるように針金で頭をぐりと巻く。板チョコが溶けて真っ二つになり針金がビヨンと弾けるまでくわえておく。

（戦争の博物館で見た1枚の写真と別日に食べた濃いチョコレートケーキを重ね合わせて。）

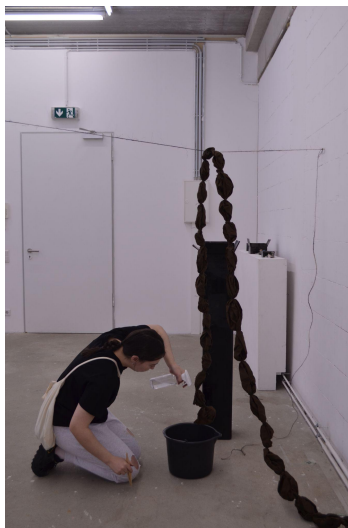


箱④

素材：石粉粘土、土に混ぜるキラキラの金属、ちいさい洗濯バサミ、ボウル

ボウルの中で石粉粘土とキラキラの金属を捏ね合わせて混ぜり合った素材で手の平の形を作って、持ち手として洗濯バサミで挟む。

（自然史博物館で見た動物の剥製を作るプロセスより。）



箱⑤

素材：茶色い紙、針金、木の棒、水が入ったスプレーボトル
細長い箱から等間隔で針金を縛って腸のような形に加工した細長い茶色い紙を取り出して紐に引っ掛ける。垂らした紙に水を吹きかけて溶かして紙の一部を引きちぎる。同時に溶けた塗料が混ざった茶色い水が滴り落ちる。

（チョコレート博物館に行った日と、滞在中の自分の腸内環境を重ね合わせて。）



箱⑥

素材：コーヒー、コーヒーカップ

コーヒーカップにコーヒーをなみなみ注ぎ、それを片手で持った状態で片足をあげて立った状態でしばらく止まる。バランスが崩れた瞬間コーヒーを飲み干す。あげた片足の太もも部分のズボンに落ちたコーヒーのしみをハサミで切り抜く。（カフェで提供されたコーヒーを持って階段を上った時のこと。）



箱⑦

素材：ウレタンスポンジ、毛糸

大きな本に見立てたウレタンスポンジ。毛糸を使って背表紙を閉じた。この大きな本を開いて中身を観客に見せる動作を行う。そして立てかけた本の中身に向かって座り、ウレタンスポンジの表面を齧る。

（産業アーカイブ施設のスタッフの男性の仕草より。）

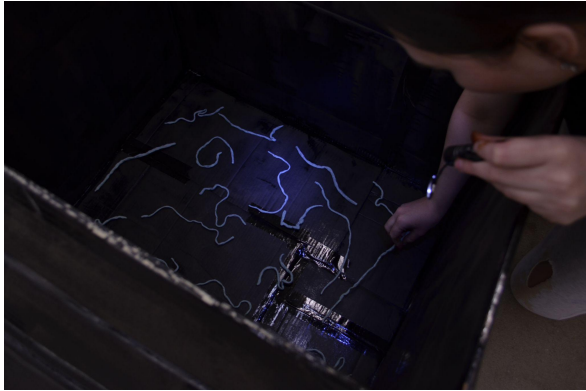


箱⑧

素材：紙

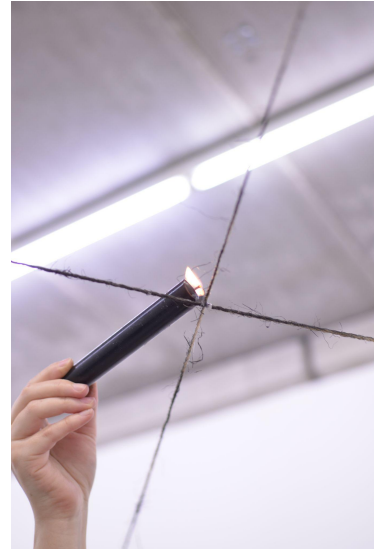
頭が入るちょうどぴったりのサイズの箱。中の5面に紙を貼り、その紙にはドイツ語に翻訳した「不在」に関する自作の文章を書いている。箱をかぶり中のドイツ語の文章を読み上げる。

（滞在中に日本で行われた選挙と、アーカイブ資料で見た自分がまだ生まれていない年代の新聞を重ねあわせて。）



箱⑨

素材：オープンで焼いた粘土のミミズ、ペンライト
箱の底に散らばめた30匹の粘土で作ったミミズをペンライトで照らしていく。1匹手でつまみ持ち上げてペンライトで照らす。
(雨上がりの散歩の時の出来事から。)



箱⑩

素材：黒いろうそく
パフォーマンスの最初に解いた紐を部屋の壁から壁にX状に張り、その交点の部分にロウを垂らし固める。ハサミで固まった交点の部分のみを切り取る。
(散歩中に見つけた黒い蠟燭から。)



空箱の最後の状態

空箱には、10個の箱のパフォーマンスによってそれぞれ取り出された素材の一部が集められ、その都度素材同士をくっつける作業をした。最後には10個の素材がひと塊になってできた小さな彫刻が現れ、空箱の中に収められ、箱の蓋を閉じてパフォーマンスが終了する。

C.本プログラムにおける予算配分

支出：99,850円

(内訳)

- ・1日あたり光熱水費相当分350円×31日 10,850円
- ・リサーチ費用 15,000円
- ・移動費 20,000円
- ・制作費 20,000円
- ・滞在中の食費 30,000円
- ・雑費 5,000円

収入：100,000円

(内訳)

- ・実費(作家の副業より)
- ・滞在後の冊子販売の売り上げ
- ・助成金(京都市芸術文化特別奨励制度を申請中)